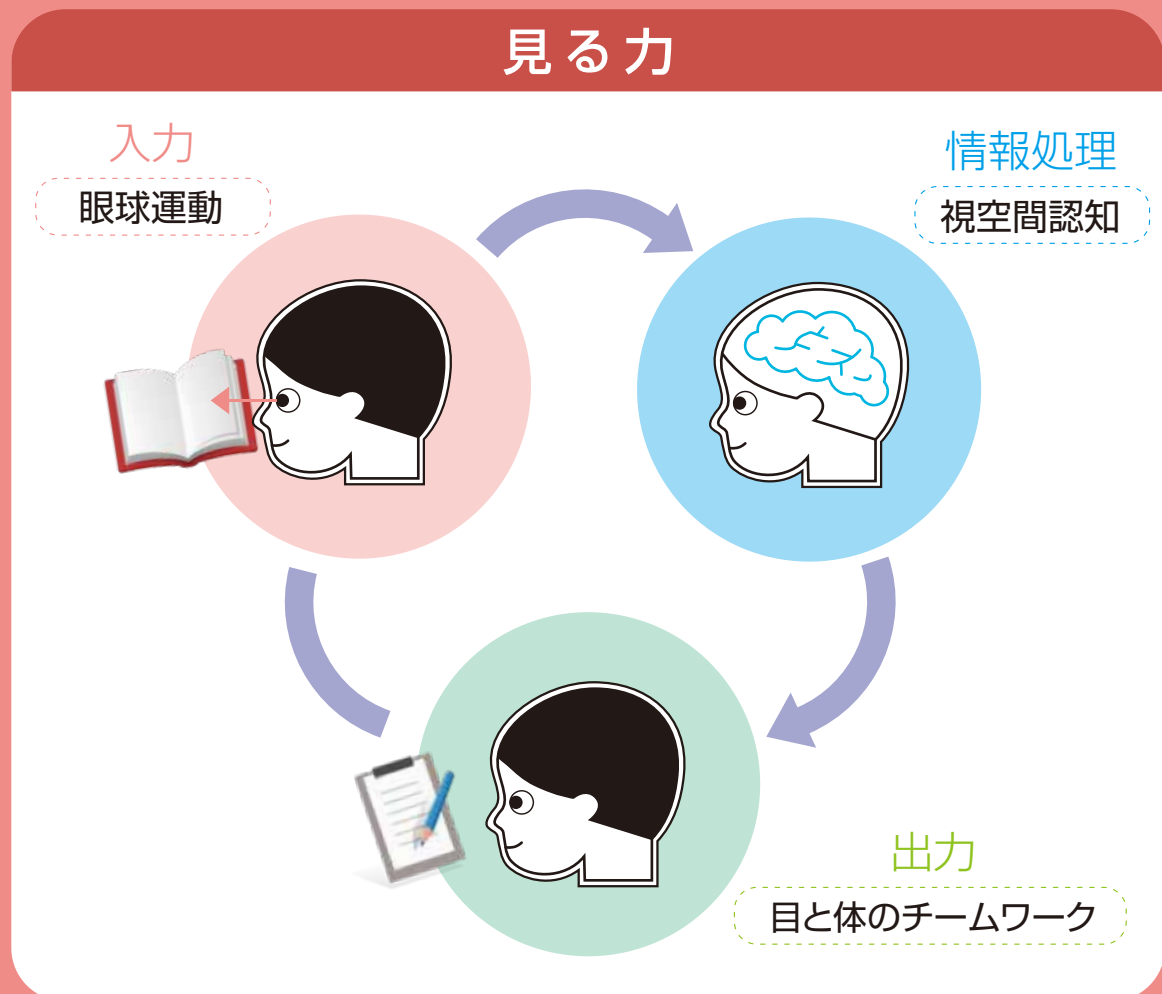


さくらのシ・テ・ン ビジョントレーニング

ビジョンとは、視力に関する機能よりはるかに幅広く複雑なものです。私たちは、運動や学習、生活の場面など、あらゆる場所で眼を使っていますが、「ただ単にものを見る」ための視覚のシステムは、生まれたときにはほぼできあがっています。しかし、ビジョンは発達とともに身についていくものなのです。ビジョンは大きく分けて「眼球運動」、「視空間認知」、「目と体のチームワーク」という3つの構成要素があります。

見る力



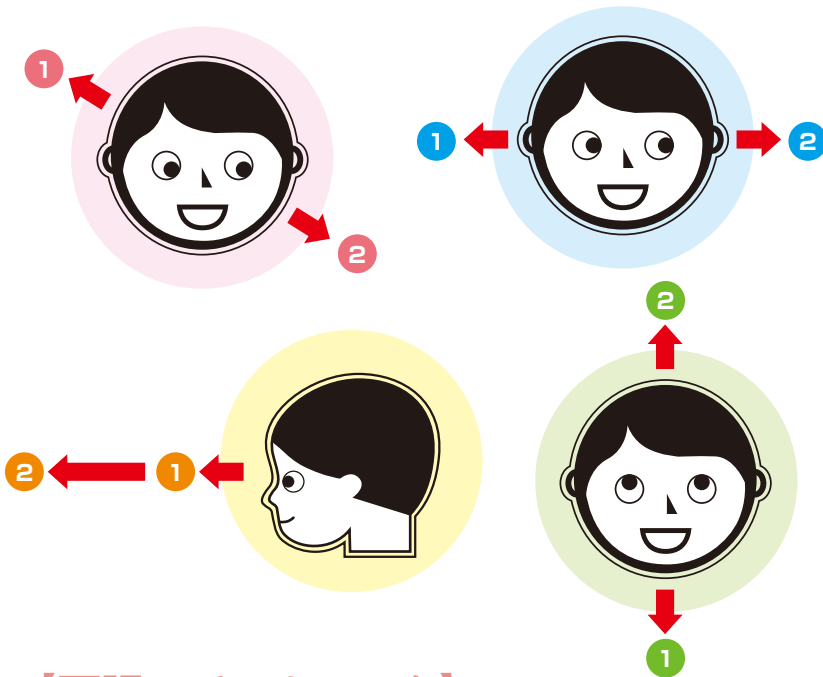
眼球運動：入力

眼球運動は大きく3つに分けられます。

ついでにせいがんきゅううんどう

【追従性眼球運動】

見ているモノの動きに合わせて滑らかにそして動いているものと同じ速さで眼球を動かすことです。



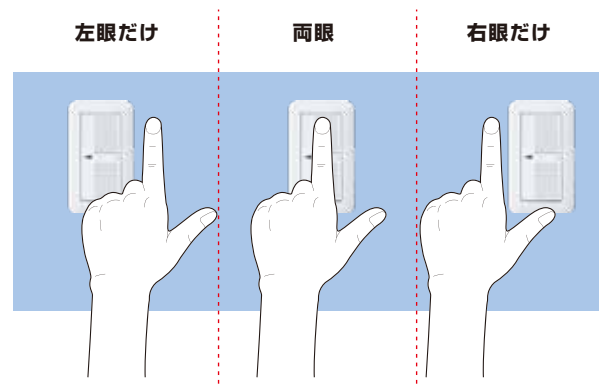
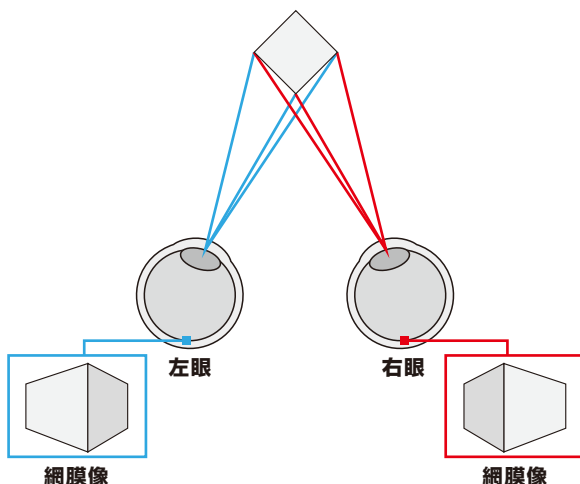
ちやうやくせいがんきゅううんどう

【跳躍性眼球運動】

一点から別の一点へ視線をすばやくジャンプさせる眼球運動。これは、多くのモノの中から必要な情報を早く正確に見つけるために必要な働きです。

【両眼のチームワーク】

両眼を使うことにより、物の距離感や立体感をつかみます。その時、対象物に焦点を合わせるために、モノとの距離に合わせて、右眼と左眼の視線を変化させています。



視空間認知：情報処理

「入力」された視覚情報は脳へ伝わり、「情報処理」という第2ステップへと引き継がれます。この情報処理のことを視空間認知と言います。視空間認知は、眼から入った情報を脳で把握する能力です。空間の一部ではなく、全体像を把握するはたらきがあります。ただの点や線だった情報が、一つの形として具体的にイメージすることができるのは視空間認知のはたらきのおかげです。視空間認知のはたらきには以下の『4つ』があります。

①形や色を弁別する

○と△が違う、赤と青は違う、ということです。

②位置や色・形の不揃いにかかわらず、「同じ」ものだと認識する

例えば、『丸』は○も●も大きさが違って、形が歪んでいても、丸のある場所が違って、同じ『丸』だということです。

③空間的な位置を把握する

平面に限らず立体的にも、ものがどこにあるかがわかるということです。

④見たい対象と背景を区別する

ルビンの杯やボーリングの少女と老婆が有名です。



ルビンの杯



ボーリングの少女と老婆

眼と体のチームワーク：出力

脳の中で認知された情報をもとに、私たちは体を動かします。
これは、「入力」「情報処理」の次のステップの「**出力**」にあたります。
発達の専門用語では「眼と手の協応」といいます。

「眼と体のチームワーク」とは、
視覚のはたらきと体の動きを連動させることです。

例えば「**ボールで遊ぶ**」ことを例にあげて考えてみましょう。

例:

- ① 転がってくるボールを眼でとらえて、眼で追う→**入力**
- ② ボールが到達する位置とタイミングを脳が把握する→**情報処理**
- ③ 眼で追いながら体を動かして、手を伸ばしてキャッチする→**出力**

このように、私たちの体は視覚の情報をもとに動いています。私たちは、これらの一連の動きを普段意識することなく行っています。ボール遊びが練習しなければならないように、このような「見る」と「動く」という能力のつながりは、心身の発達にともなって活動しながら、調節していってできるようになるのです。

さくらでは、ビジョンについての内容を意識しながら遊びや活動に取り入れて心身の発達を促しています。